愛のない政略結婚なのに、
訳ありエリート御曹司に
執着愛で囲われています

目次

愛のない政略結婚なのに、
訳ありエリート御曹司
に執着愛で囲われています

5

番外編 龍と桜に願いを込めて

257

愛のない政略結婚なのに、
訳ありエリート御曹司に
執着愛で囲われています

プロローグ

「何でもしますっ！」

「そんなことを簡単に口にするな。まったくこれだから、世間知らずなお嬢様は」
キツパリとした口調で言い放った美桜の言葉を背中越しに一笑したその男——尊は、薄く形の良
い唇に笑みを微かに湛え、呆れたような眩きを落とすとそのまま立ち去ろうとする。

どうやら男は、美桜の言葉に取り合う気はないらしい。

それでも、見ず知らずの男に借りを作つたままでは気が収まらない。

美桜は咄嗟に、男が身に纏っている仕立ての良さそうなダークスーツの袖口を掴んだ。

男は驚いたのか、僅かに反応を示してすぐに振り返ると、珍しいものでも見るように美桜のこと
をまじまじと見下ろした。

身長一五六センチしかない小柄な美桜にとつて、一八〇センチはあろうかという高身長
の男を見上げるのは少々骨が折れるが、それよりも男の放つ威圧感が凄まじい。

どこか恐怖心にも似た感情が湧き起こってくるが、男に強い視線で見つめられて目を逸らす
ことができない。

艶のある濡羽色の髪はタイトに撫でつけられていて、髪と同系色の切れ長の鋭い双眸と恐ろしく
整った顔立ちのせいにか、ただ見下ろされているだけなのに身がすくむ心地だ。

スーツを纏っていても鍛えられているだろうことが窺える、上背のある男の精悍な体軀には、
こはかとなく妖艶な色香が漂っている。

まるで自分とは同じ次元で存在していないような……。このとき、美桜はなぜか男のことをそん
なふう感じていた。

そこに男から、冷淡とも取れる抑揚のない低い声音が降ってくる。

「どういうつもりだ」

彼の醸し出す異様な雰囲気呑まれて圧倒されていたが、その声で我に返り、美桜はなおも男に
言い募っていた。

「……た、助けていただいたのに、何のお礼もできないまままだなんて、それでは私の気が収まりま
せん」

借りを作つたままでは嫌だというのもあるが、どうしてここまで頑なになっているのか、美桜自
身にもわからない。

これまで二十四年生きてきて、こんなにも強く自分の意思を貫こうとしたことがあつたらう
か……

そう思うほどに、自分でも驚くような強い意思と行動力を発揮してしまうのだった。

「だったら、何をしてくれると言うんだ？」

依然としてスーツの袖を掴んだままの自分に向けて、試すような眼差しと言葉とを投下した男に
対し、美桜は意思のこもった強い口調で言い放つ。

「やれと言われれば何でもします。本気ですっ！」

「だったら脱げよ」

「……え？」

「何でもすると言ったのはおまえだ。だったら、脱いで俺のことを愉しませてみろ」

男は間髪入れず、有無を言わせぬ威圧感を含んだ言葉を放った。一瞬何を言われているのかが理解できず、美桜は思わず立ちすくむ。

春めいた季節にぴったりの艶やかな雲華の振袖を纏った美桜に、男は意味深な視線と言葉を向けた。その意図を理解した刹那、美桜の全身に熱が滾った。

何でもすると言ったのは自分だ。今更なかつたことになどできない。

おそらく、この男はなかつたことになどしてくれないだろう。直感的にそう確信した美桜はゴクリと生唾を飲み下す。

これまではずっと家の駒として、与えられた役割を果たすためだけに生かされてきた。

今日は、その役割を果たすために、格式高い高級料亭へと赴いていたはずだったのに……

（——これから私は一体、どうなってしまうんだろう）

美桜は混乱する頭で、今更ながらにそんなことを案じていた。

第一章 鳥籠のお嬢様

「わあ、ちよつと向きを変えただけでこんなに変わるなんて！ さつすが美桜さんだわあ！」

「そ、そんなことないですよ。私なんてまだまだです」

厳しかった寒さもようやく和らいできた、三月を迎えたばかりのある午後のこと。

いつものように大広間で、華道教室の生徒たちに交じって、淡いパステルブルーの小紋に身を包んだ天澤美桜は生け花に勤しんでいた。

美桜は、江戸時代から続く長い歴史を持つ華道の流派である「清風」の家元・弦の娘である。

物心がついた幼い頃から、絵本や玩具よりも華道に興味を示し、慣れ親しんできた。今では師範の腕前を活かし、父と後継者の兄・愼のサポート役として生徒の指導も担っている。

今日も花嫁修業の一環としてお稽古に通う優子が、生けたばかりの花に手を加えながら談笑を交えていた。

もうすぐ二十四歳を迎える美桜は、優子と年が近いせいとか、話していると時間なんてあっという間に過ぎてしまう。

何よりも華道に重きを置く両親の意向で、美桜は大学への進学を諦めざるを得なかった。外の世界を知らない美桜にとって、優子は教室の生徒でありながら友人のような存在でもあった。

家族と過ごす時間よりも、こうして生け花に勤しんでいる時間が、唯一心が安らぐ時間だといつてもいい。

なぜなら美桜は、父が愛人に産ませた子ども——妾腹の子だったから。ちょうど今頃の季節、三つの頃に実の母親を病気で亡くしている。身寄りのなかった美桜は、父親の元に引き取られたのだ。

以来、父の本妻である薫に、それはそれは厳しくしつけられてきた。

『あなたには、いずれ天澤家を盛り立てるための駒として役立ってもらわなければいけませんから、しっかりと習い事に精進してくださいね』

幼い美桜に対して冷たく言い放った薫の言葉が今も耳にこびりついている。

弦は温厚で物腰も柔らかく、とても優しい人だ。

けれど、愛人との間にもうけた美桜のことを引き取った負い目があるせいか薫の言いなりで、美桜に対してはよそよそしいところがあった。

楽しい時間も終わり、後片付けに追われていた美桜は使用人に呼ばれ、離れから豪華絢爛な数寄屋造りが見事な母屋へと赴いた。

大広間の床の間には、躍動感ある杖振りえだぶを活かして力強く生けられた梅の花が飾られている。

家元である父が生けたものだ。

見慣れた風景だが、どこかよその家にもお邪魔しているような気がして落ち着かない。

きつと、凝った派手な装飾が施されているからだろう。

三年前に隠居した前家元である祖父・弦一郎げんいちろうの意向で、松江市にある小泉八雲こいづみやくも旧居の居間を再現しているというのだが……

格式張った意匠を嫌い、内面を磨いて客人をもてなすという茶人の精神が、簡素で自由な空間として形になっていったという数寄屋造り。

素材の良さをそのまま活かすことが大切だとされているらしいが、随分とかけ離れているように思えてならない。

美桜がそう感じるのも無理はなかった。

生け花のPRを兼ねて朝の人情報番組に出演した慎は、家元譲りの見目麗しい容姿が注目されて以来、「華道界のイケメン王子」として度々メディアで取り上げられるようになった。

代議士の娘だった薫のブランド志向も相まって、父も兄も体面ばかり気にしている。

そのせいで、何もかもが滑稽に思えてならない。

でも、いずれこの家から出て行く身である自分には関係のないことだ。

引き取って何不自由なく育ててもらったのだから、ちゃんと駒として役に立てるよう自分の役割を果たすことを考えなくては。

二人の会話を耳を傾けていたはずが、美桜は気づけば一人、物思いに耽ひたっていた。

余計な雑音に惑わされないように言い聞かせているところに、薫のやけに甘ったるい声音が届いて、美桜は瞬時に現実へと引き戻された。

「美桜さんに縁談のお話があるんですよ」

（——とうとう駒である役割を果たすときがきたのか）

現実を引き戻され、座卓を挟んだ両親の元へと視線を向ける。

父と目が合った瞬間、あからさまに気まずそうな顔で視線を逸らされて、胸がズキンと痛んだ。今更、父に何かを求めていたつもりではなかったが、本当は心のどこかで何かを期待していた自分に気づかされた。

我ながらそんな自分が不憫に思え、鼻の奥がツンとしてくる。思わず泣いてしまわないように、美桜は膝の上の拳にぐっと力を込める。

対して薫は、ようやく厄介払いができるとばかりに、嬉々として見合い相手の説明を始めた。

「父の古くからの友人の息子さんなんですけれど。外務大臣を務めていらっしやったお父様の地盤を引き継いで、次の選挙に出馬するんですって」

それによると、相手は大物代議士の四十歳になるご子息であるらしい。

（——四十歳！）

ついさっきまで父の反応に少なからずショックを受けていた美桜だったが、今度は相手の年齢に別の意味で大きな衝撃を受けてしまっている。

家の駒として厳しく育てられてきた美桜は、名門で知られる女子校に通っていた。それも車での送迎付きで、外泊も許されず、もちろん恋愛経験もない。

それでも、小説やドラマのような恋愛や出会いに少なからず憧れを抱いていた。

たとえ政略結婚だったとしても、その相手に恋愛感情を抱くかもしれない、と。

そんな夢が一瞬で崩れ去ったのだ。

絶望して暗い顔をした美桜の元に、薫の甘ったるい声音が再び耳に届いた。

「美桜さん。この方よ。誠実そうな素敵な方でしょう？」

その声に俯いていた顔をゆっくりと上げてみる。

座卓に置かれた見合い写真には、どう見ても五十過ぎの脂ぎった中年男性の姿が映っていた。

「……!?!」

あまりのショックに目の前が暗転し、目眩を覚えた美桜は絶句してしまう。

そんな美桜のことなどおかまいなしに、満面の笑みを浮かべた薫は、引きつった笑みの弦に見合いの振袖や日取りの相談を持ちかけた。

「ねえ、あなた？ 善は急げと言いますし。いつもお世話になっている銀座の『くらや』さんで着物をお願いしておきますね」

「後片付けが残っていますので、離れに戻りますね」

「……あっ、ああ、頼む」

「あら、美桜さん。まだいらっしやったのね」

美桜は聞いていられなくなり、二人に中座すると伝えるのがやっとだった。薫の言葉に何かを返すような余裕もなくふらりと立ち上がった美桜は、覚束ない足取りで大広間を後にした。

離れに向かう途中の長い廊下の角を曲がったところで、運悪く兄の慎と鉢合わせしてしまう。

「何だよ、浮かない顔して」

「……っ」

未だ茫然自失に陥っている美桜のことを、慎は哀れみの色を滲ませた眼差しで見下ろしてくる。そしてシヨックを隠せないでいる美桜に、心底楽しそうな笑い混じりの声を放った。

「無理もないか。あんな中年のオッサンと見合いなんてなあ」

「……」

おそろく見合いのことは薫から事前に聞かされていたのだろう。

ただでさえ落ち込んでいた気持ちがズンと地中深くに沈んでしまう。

どうしてこんな目に遭わなければいけないのだろう。前世で何か悪いことでもしたのだろうか。

（——ううん。亡くなった母が不倫なんかしなければ。母が私のことなんか産まなければ。そうすれば、こんなことにはならなかったに違いない。どうせ誰にも祝福なんてされないのに……そうか、生まれてきたこと自体、罪だったんだ）

そうは思いながらも、どうにも受け入れられず、気持ちは塞ぐばかり。

そんな美桜の脳裏には、慎が優しくかった頃の記憶が呼び起こされた。

まだ小学生だった慎は、今のように美桜のことを蔑むことも疎んじることもなかった。

頼りない記憶だが、薫の厳しい躰しづみや叱責しつげによって幼い美桜が泣いていると優しく慰めてくれたり、家に呼んだ友人たちと一緒に遊んでくれたりもした。

その頃の美桜にとつて、慎は優しく、頼りがいのある兄だった。

けれども、それは美桜が小学校にあがるまでの話だ。

そういえば、兄が中学生の頃、家によく遊びに来ていた友人がいたつけ。

慎よりも背が高く、いつも不機嫌そうな顔をしていたけれど、ごくたまに相好を崩す様はキラキラと眩いほどに輝いて見えた。

その笑顔から目が離せなかった記憶がある。

とはいえ、記憶も臙げで名前も顔も思い出せないのだけれど。

（——あの頃に戻れたらいいのに……）

どんなにそう願っても、それは無理な話だ。

一刻も早くこの場から逃れたくて、慎の横を擦り抜けようとした美桜は、慎によって手首をギリと強い力で掴まれて足止めされてしまう。

「おい、待てよ」

「キャッ!?」

せつかく気落ちした心が浮上しかけていたというのに、美桜は厳しい現実へと強引に引き戻されることとなった。

「おまえ、まだ処女だよな？」

「……っ！」

まさかそんなことを聞かれると思わなかった美桜は、全身を赤く染めて慄おのくことしかできない。

美桜の様子を見るまでもなく処女だと確信している様子の慎は、なおも意地の悪い笑みを深めて、
「いくら家の駒だからって、あんなオッサンが初めては嫌だろ。処女好きの男、紹介してやろうか？」

「……っ!?」

あまりの羞恥に真っ赤になって縮こまっていると、慎のニヤついた顔が眼前に迫った。
ついさつき見た見合い写真の男の顔と慎の顔とが重なってしまう。

「——やだっ！ 離してっ！」

美桜は咄嗟とっさに慎の身体を両手で押しつけた。

「おいおい、これくらいのことですわが怖がってどうすんだよ」

けれども慎は堪たえるどころか、あからさまに初心な反応を示す美桜のことを心底楽しげに見下ろし、肩を震わせている。

慎が薰と同じ態度を取るようになってから、こうしてことあるごとに揶揄てんげうわれてきたが、何を言われても右から左に聞き流してきた。

だがこの手のことに免疫のない美桜が、慎に廊下の隅に追いやられて何もできずにいると——

「美桜さん!? 大丈夫ですかっ!?」

使用人である麻美あきみの焦った声幅広い廊下に響き渡った。

麻美の姿を目にした美桜は、ホッと胸を撫で下ろした。

「……大丈夫。何でもないから」

慎はこちらへ駆け寄ってくる麻美に、いつもの飄然とした声を返すという変わり身の早さだ。

「相変わらず心配性だなあ、麻美さんは」

「あら、慎坊ちゃん。まだこんなところにいらしたんですか？ 収録に遅れるんじゃないですか？」

「あっ、そうだった」

「まあ、忘れてらしたんですか。だったら早く支度なさってください。遅れたりしたら清風の信用が台無しですよ」

「……すぐに支度します」

麻美は毅然とした態度で慎に苦言を呈し、しつかり小言も忘れない。

慎は慌てた様子で走り去っていく。

麻美は、弦一郎の代から使用人として住み込みで働いている。

天澤家の遠縁に当たる麻美は、他の使用人と違って家のことを細部まで任せられている。

行事に関しても、麻美なしでは成り立たない。

故に、薰も慎も麻美には強く出られないのである。

美桜にとって、麻美はこの家で唯一の味方であり、心の拠り所でもあった。

麻美に余計な心配をかけないためにも、普段通りを心掛けたが……

夜が更けて布団に入ってから、美桜はなかなか寝つくことができず、気づけば翌朝を迎えていたのだった。

四月初旬。朝夕の寒暖差こそあれど、日中の気温は随分と暖かくなってきた。春の季節を一気に飛び越したかのような汗ばむ日もあるが、今日はどんよりとした曇り空のせいで少し肌寒く感じられる。

あたかも憂鬱な美桜の心情を表してでもいるかのよう。

高級料亭の荘厳な佇まいに見合った趣ある和風庭園には立派なソメイヨシノが植えられており、ちょうど見頃を迎えていた。

白みがかかった薄桃色の花びらが薄陽を浴びて淡く煌めき、何とも儂げだ。

小学生の頃、名前の由来について弦に尋ねたことがあった。

なんでも、母は桜の花が好きだったそうだ。

その中でも、ソメイヨシノが特に好きだったらしい。

母が名付けた「美桜」という名前には、ソメイヨシノの花言葉になぞらえ、誰からも愛される、清らかで美しい心根の女の子に育ってほしい、という願いが込められているのだそうだ。

当時は理解できなかったけれど、母が心から自分を愛してくれていたからだ、今ならわかる。

たとえ祝福してもらえなくとも、愛する人との子どもを授かったのだから、幸せだったに違

ない。

そんな母が羨ましく思えてならない。

ソメイヨシノを眺めていたせいか、いつしか美桜は思いに耽つていた。

美桜の周辺には、終始穏やかな愛想笑いを貼り付けている弦の隣で、楽しそうに声を弾ませる薫と、見合い相手とその両親との会話が絶え間なく飛び交っている。

「休日には読書をしたり、盆栽を弄つたりしています」

「まあ、それは素敵な趣味ですわあ」

美桜はそれを遠い意識の外側で感じていた。

そこへ薫から不意を突くように、見合いの席につきまもののお決まりの台詞が放たれた。

「そろそろ若い二人にお任せして、私たちは席を外しましょうか？」

薫に賛同した相手方の父・佐久間が、すぐさまお世辞と冗談を寄越してくる。

「そうですね。いやあ、それにしても美しいお嬢さんだ。もう少し若ければ私が結婚したいくらいですなあ」

だが、その口吻からはねっとりとしたいやらしい響きを感じられた。

視界に入れるのが嫌で、意識的に逸らしていた視線をゆっくりと向けると、佐久間のいやらしくニヤついた顔が待ち受けていた。

美桜の身体をねっとり品定めするその視線とぶつかった瞬間、ゾクゾクとした悪寒が美桜の全身を走り抜けた。

（——やだ。気持ち悪い）

そう感じた美桜は、底知れぬ嫌悪感と不快感を覚え身体を強張らせた。

ほどなくして、美桜は一人、奥座敷で待たされていた。

佐久間の息子は事務所に連絡を入れるとかで、美桜だけが通されたのだ。

しつぽりと趣のある雅な和室はやけに静かで、外の世界から隔離でもされているような心地になっってくる。

奥には襖で仕切られた続き間があるが、それがどうにも気に掛かる。

（——布団でも敷かれていたりして……。ま、まさかね……）

脳裏には、時代劇でお馴染みの若い娘が悪代官に手籠めにされる場面まで浮かんでくる。

——とそのとき、入り口の雪見障子が開け放たれ、そこから姿を現したのが息子ではなく佐久間だったことに、美桜は戸惑いを隠せなかった。

「いやあ、待たせて悪かったねえ」

その声を耳にした途端に、なりを潜めていた嫌悪感と恐怖感が舞い戻ってくる。

正座を崩して手を後ろ手についた美桜の背中には、嫌な汗が滲んでいる。

そんな美桜の姿を見下ろしながら、後ろ手に障子を閉ざした佐久間は、見合いの真の目的を暴露しはじめた。

「息子は、少々困った性癖の持ち主でねえ。他者に恋愛感情を抱けないんだそうだよ。そこで、君

に偽の妻を演じてもらいたくてね。そうなると色々辛いだろうから、代わりに私が君の欲求を満たしてあげるからねえ」

そうしてねつとりとした視線同様、いやらしい声を響かせながら美桜との距離を詰めてくる。

身の危険を覚え、何とかこの場から逃れたくても、ガタガタと震える身体が思うように動いてくれない。

（——やだっ！ 来ないで！）

美桜が心の中で叫んだ刹那、ボタンツという豪快な音とともに、再び雪見障子が開け放たれた。

驚いた美桜が見遣った先には、ダークスーツに身を包んだ三人の目つきの悪い男たちが部屋に押し入ってくる様が見て取れる。

一人は厳つい顔に大きな傷のある大柄の男。二人目は中肉中背の優男風。三人目はやけに整った顔をしている。

皆一様に威圧感があり、眼光が鋭く、独特な雰囲気纏っているように見える。

佐久間は、驚きながらも不遜な声で詰問した。

「なっ、何だっ！ おまえたちはっ！」

だが乱入者は一切怯むことなく、佐久間を一瞥した美形の男が一笑して優男に目配せする。

首肯した優男は傍にあった木製の座椅子を蹴り上げ、底冷えのする迫力満点の鋭い重低音を轟かせた。

「息子の見合いの席で相手の女の味見をするようなゲスに、おまえたちなんて呼ばれる筋合いはね

えんだよ。そんなことより、うちの舎弟を妙なことに巻き込んだ落とし前、きっちりつけてもらおうか！」

その言葉に思い当たる節でもあったのか、佐久間の全ての動きが停止した。けれど、すぐに表情を切り替えた佐久間からは白々しい言葉が飛び出してくる。

「何のことだ？」

事情を知らない美桜が白々しく感じてしまったぐらいいだ。

当事者にしてみれば、甚だしいことの上ないと思つたに違いない。

案の定、出方を窺っていた優男が忌々しげに顔を歪め、さつきよりも低く鋭い怒声を炸裂させる。

「しらばつくれんな！ 堅気のくせに極道使つて甘い汁吸いやがつて。ネタは上がつてんだよ！」

唾をまき散らしながら佐久間の胸ぐらを引つ掴んだ優男は、今にも殴りかからんばかりの勢いだ。任侠映画さながらの光景を前に、美桜は為す術もなく、非現実的な光景を固唾を呑んで見守ることしかできないでいる。

そんな美桜のことを美形の男が一瞥したかと思えば、優男の元にゆつたりとした動作で歩み寄る。目つきは悪くとも落ち着いた物腰と、顔が恐ろしく整っているせいか、どこか気品が漂っていて知らず知らずのうちに目が惹きつけられる。

その姿にほうつと見惚れる中、美形の男が落ち着いた物腰からは想像できない、腹に響くような鋭い重低音を発した。

「相手は堅気だ、手を出すな。話し合えば済むことだ」

指示に従つた優男が胸ぐらから手を引いたところで、美形の男が佐久間の肩にポンと手を置いた。そして眼光鋭い切れ長の双眸で冷ややかに見据えつつ、口元に微かな冷笑を湛え、懐から一枚の名刺らしき白い紙片を取り出し、佐久間の前に放つた刹那。

優男を制したときよりもゆつたりとした口吻で重低音を響かせた。

「なあ、佐久間先生」

途端に、辺りに重苦しい緊張感が張り詰める。

男から放たれる威圧感たるや凄まじいものだった。

（——すごい迫力。カリスマっていう言葉は、こういう人のためにあるんだろうなあ）

男の迫力に圧倒された美桜は、この場にそぐわないことを思ってしまった。

「……っ、う……尊……」

佐久間は切れ切れに男の名を口にするのと名刺を手にしたままへたり込み、恐怖で血の気の引いた蒼白い顔で呆然としている。

そしてこの世の終わりだともいうように、不意にこう呟いた。

「……いくらだ」

けれど聞こえなかったようで、尊と呼ばれた男が怪訝そうに問い返す。

「何か言ったか？」

すると佐久間は、開き直つたように不遜な声を放つた。

「金が目当てなんだろう？ いくら出せば気が済む？」

「どうやら金銭で解決するつもりらしい。」

「——解決したら、今度こそきつと……」

美桜が落胆しかけたとき、佐久間の正面にいる尊から、威圧感満載の決然とした言葉が広い和室にこだました。

「金なんて必要ない。今後一切、うちとは関わらないでいただきたい。それだけですよ。さもないと、これをメディアに公表させていただきます」

尊が懐から取り出したスマホからは、美桜が佐久間に襲われそうになっていたときの音声が流れた。目論見が外れ、尊を驚愕の表情で凝視し肩を落とした佐久間だったが、尊は無情にも部下らしき二人に淡々と命令を下すのだった。

「先生がお帰りだ。送って差し上げる」

「ほら、立て。行くぞ」

「はっ、離せっ！」

佐久間が暴れるも、慣れた様子の優男と大柄の男にあっさり両側から拘束され連行されていく。一見すると憤と同年代のようだが、甘い顔立ちの憤とは違って纏まとっている独特のオーラと凄まじい威圧感に鋭い眼光のせいにか、端正な相貌はとても凜々しく、どこか危うさを孕んでいるように見える。

美桜は、眉目秀麗、容姿端麗の言葉を体現したかのような尊にすっかり魅入られていた。

そんな美桜の元へ、尊が悠然と歩み寄ると、思いのほか優しい声で話しかけた。

「怖がらせて悪かったな」

驚きのあまり、心臓と身体とがビクンツと大きく跳ね上がる。

その様子に、僅かに目を見開いた尊がどうしたことか、急に美桜から顔を背けて肩をふるふると震わせはじめた。

「——ん？ どうしたんだろう、急に……」

美桜がキョトンとしてみると、とうとう我慢しきれないとばかりに男が笑い声を漏らす。

美桜が気づいて顔を赤らめると、そこには目尻に涙を浮かべた尊の無邪気な笑顔があった。美桜はまたもやその笑顔に惹きつけられ、目が離せなくなった。

それだけではない。初対面のはずなのに、なぜだか懐かしさを覚えてしまった自分に対しても戸惑うばかりだ。

美桜の心情を知ってか知らずか、ようやく笑いを収めた尊が、今度は目の前に大きな手をスッと差し出してきた。

「ほら」

意図が掴めず尊の顔と手とに視線を交互に行き来させていると、ふっと柔らかい笑みを零した男が思わず漏らしたのでらう小さな呟きに、美桜はますます首を傾げるしかなかった。

「ぼうっとしてるのは相変わらずだな」

尊の笑顔に見惚れ、呟きを聞き逃したというのもある。

だがそれよりも、畏怖を抱かせるほどの威圧感を纏まとう男が垣間見せる優しい表情にいちいち惹き

つけられ、苦しいほど胸を高鳴らしてしまう自分が不可解でならなかった。

「――私ってば、さつきからどうしちゃったんだろう」

戸惑いを隠せないでいると、再び尊の声が割り込んでくる。

「おい。腰が抜けて立てないのか？ それとも、俺に抱き起こしてもらいたいのか？」

抑揚い混じりの尊の声音に、今度こそムツとした美桜が尊の手を無視して立ち上がろうとしたときのことだ。

振袖の上前が乱れ、襦袢までが下前もろとも大胆にはだけて捲れ上がっていたことに、今更ながらに気づいた。

「――キヤツ!？」

おそらく尊からは下着までが見えていたに違いない。

とんでもない羞恥に見舞われた美桜が真っ赤になりつつも、大慌てで乱れた身なりを正している

と――

「そんなに慌てなくても、それぐらいで欲情しないから安心しろ」

「――っ!？」

尊が抑揚うように笑い、その言葉に羞恥心を煽られた美桜は顔を真っ赤にして両手で覆い隠し、身悶えるしかなかった。

ややあつて、不本意ながらも尊の手を借りて立ち上がったところで、男に礼を告げていなかったことを思い出す。

成り行きとはいえ、貞操の危機を救ってくれたこの男に、誠心誠意、礼を尽くさなければならぬ。

天澤家の娘である以上、家の名を汚すようなことがあつてはならない。

幼い頃より薫に幾度となく言い聞かされてきたことだ。

今まさに立ち去ろうとする、尊の広い背中に真っ直ぐ言い放つ。

「あいつ、先程は助けていただき、ありがとうございました」

「別にあんたを助けようと思つてたわけじゃない。ただの偶然だ」

尊は足を止めることも振り返ることもなく、背中越しにそれだけ言い置くと、そのまま出ていくとする。

そんな尊の姿からは、先程まで美桜が感じていた懐かしさも優しい雰囲気も、一切感じられない。美桜に見せていた優しい表情など、幻だったのかと思つてしまうほどに。

自分とは一線を画すような態度を見せる尊のありように、美桜は言ひのない寂しさを覚えてしまう。

そのせいか、気づいたときには立ち去ろうとする尊を大きな声で引き止めてしまっていた。

「待つてください。せめてお礼をさせてくださいっ!」

「あなたに礼なんてされる筋合いはない」

けれど尊からはやはり頑なな言葉が返されるだけで、美桜はますます引くに引けなくなっていく。

「何でもしますっ!」

「そんなことを簡単に口にするな。まったくこれだから、世間知らずなお嬢様は」

いつも家族に言われるがままの自分がこんなにも頑なになって、スーツの袖まで掴んで男を引き止めるなんて、それだけでも驚きなのに。それがまさか……

「どういうつもりだ」

「……た、助けていただいたのに、何のお礼もできないままだなんて、それでは私の気が収まりません」

「だったら、何をしてくれると言うんだ？」

「やれと言われれば何でもします。本気ですっ！」

「だったら脱げよ」

「……え？」

「何でもすると言ったのはおまえだ。だったら、脱いで俺のことを愉たのませてみる」

尊との間で繰り広げた押し問答の末にこんな展開が待っていたようとは、誰が予想できただろう。少なくとも美桜には、何もかも思ってもみないことだった。

第三章 鳥籠から出るために

身動き一つ取れずに瞳どうもく目したままの美桜の目に映る尊は、依然、こちらの出方を見定めるように、凄まじい威圧感と鋭い眼光を放ち続けていた。

美桜は今一度、ゴクリと喉を鳴らして唾を飲み下し、覚悟を決めた。一瞬でも気を抜けば震えてしまいそうな手を着物の襟元に引っかけ、そのまま豪快にくつろげようとした刹那、廊下からこちらに近づく足音が響き始めた。

おそろく二人の男が戻ってきたのだろう。

途端に言いようのない羞恥に襲われ、身がすくみそうになったが、ここでやめるわけにはいかない。

ギョッと臉を閉ざし、ひと思いに襟元の手を引き下げようとしたそのとき――

「もう、よせ」

威圧感満載で無表情を決め込んでいた尊から、制止の声が掛かった。

「……え？」

驚いた美桜の口から間拔けな声が飛び出した。すると、ここぞとばかりに、尊が意味深な言葉で攻め立ててくる。

「どうした？ ガツカリしてるのか？ それとも、二人の前で俺に抱かれないのか？」

羞恥に駆られ真っ赤になった美桜は、絶句しその場で固まってしまふ。

あからさまな反応を見せる美桜のことを満足そうに見遣った尊が再び声を放つ。

「言つとくが、俺は女を輪姦する趣味はないから安心しろ。帰ったらたっぷり愉しませてもらおう。ばーっと突っ立てねえで行くぞ」

「——へっ!？」

今度は違った意味で目を丸くした。

（——行くって、どこへ？）

混乱する美桜の思考に尊の声が飛び込んでくる。

「助けた礼をしてくれるんだろう？」

「……は、はいっ」

混乱しつつも、礼をしたい気持ちはあるので、美桜は反射的に返答していた。

「だったら俺についてこい。飽きるまで傍に置いてやるから、精一杯励め。嫌ならここに残ればいい。これまで通り家の駒として、あの変態代議士の家に嫁に出されて、いいように弄ばれるだろうがな。俺はどちらでも構わない。どうするかは自分で決めろ」

尊の言葉は、抑揚のない淡々とした声と同様に、一切の感情がこもらない、冷淡とも取れるものだった。

美桜の境遇を把握していたのには驚かされたが、そんなことよりも、どうしたかを自分の意思

で決められるように導いてくれている、そんな気がしてならない。

とはいえ、初対面で素性も知らないこの男にこのまま縋っていいものかと躊躇する気持ちもある。だが、どこか懐かしさを感じた彼とこのまま別れたくないと心が訴えかける。葛藤していた美桜の口からは、思ったままの言葉が自然と零れ落ちていった。

「……でも……迷惑になるんじゃない」

そこまで口にしてから、ハツとする。

自身の言動に驚きを隠せない美桜を、尊は口元に笑みを湛え、その鋭い眼差しで射抜くように見据えながら問いかけた。

「ということとは、俺についてくる気があるってことだな」

コクンと僅かに顎を引いて意思表示した美桜に、尊が更に言葉を重ねる。

「だったら、ゴチャゴチャ言っただけで、さっさと行くぞ」

そうして、そのまま美桜の身体を軽々ひよいと左肩に担ぎ上げてしまふ。

「……え？ ちょ、キヤッ!？」

「暴れるな。でないと落ちるぞ」

「——っ!？」

驚愕して手足をばたつかせる美桜を笑み混じりに咎め、羞恥に見舞われ真っ赤になった美桜が身を縮めたところで、尊は今度こそ和室を後にしたのだった。

尊の肩に担がれた美桜は、部下を従えた尊によって駐車場へ運ばれた。

そこから黒塗りの大型高級セダンに乗り込み、到着したのは都心の複合商業施設内にある五つ星ホテルのスイートルームだった。

尊は施設内のタワー棟にあるオフィスに立ち寄ることと、部下のヤスと兵藤ひょうとうに託された美桜は、天澤家の数寄屋造りを彷彿とさせる和風モダンな部屋に一人残された。道中は驚きの連続だった。

それもそのはず、尊が泣く子も黙る日本最大の極道組織「龍神会りゅうしんかい」の若頭だというのだから。——しかも、今一番勢いがあるとされているIT企業「T&Kシステムズ」の経営者でもあるというのだ。美桜が驚くのも無理はない。

いくら世間知らずな美桜でも、「極道」が何かの認識はあつたが、ドラマや映画などで知り得た知識ばかり。ヤスから正体を明かされるまで気づかないはずである。

尊には、呆れを孕んだ声で馬鹿にされてしまった。

「そんなことも知らず、のこの俺についてきたのか？」

（——確かにそうだけど、そんな言い草あんまりだ）

憤慨して言い返そうとするも、言ったところでどうにもならないと言いつつ。

「……そ、それはだつて、突然のことで気が動転していたし。それに……」

どうにも気持ち収まらず、尊を恨みがましくじとつと見ていると、美桜にだけ聞こえるように耳元で、面白おかしく茶化されてしまう。

「ああ、俺に無理やり担かかられたことを根に持つてるのか。それはすまなかつたな。詫びに尻でも撫

でてやるるか」

「——け、結構ですっ！」

顔を赤く染め、ますますむくれてしまった美桜のことなど尊は歯牙にもかけない素振り、知らん顔を決め込んでいた。

それなのに、極道である尊に、美桜は不思議と嫌悪感も恐怖も感じなかった。

それどころか、気づけば、感情のままに何もかも曝さらけ出してしまっている。

（やっぱり助けてもらったせいなのか）

だからって、尊が極道だとわかった以上、手放しでは喜べない。

飽きるまで置いてくれると言っただけだが、その後はどこかに売られてしまうかもしれない。

一人物思いに耽ひたっていた美桜の脳裏に、別れ際に目にした尊の後ろ姿が浮かんでくる。

夕焼けに照らされた尊の佇たぐまいは、抜群なスタイルと長身のせいかとでも様になっていて、まるで一枚の絵画でも眺めている心地だった。

とても洗練されていて、大人の色香も相まって、自然と視線が惹きつけられる。

（——きつと、すごくモテるんだろうなあ）

美桜は胸にズキンと不可解な痛みを感じつつ、そのときの光景を思い返していた。

一方、尊は美桜のことなど少しも気にかけていない様子で、一度も振り返ることなく行ってしまった。

尊の姿が見えなくなっただけから、その面影に囚こわれてしまったかのように、美桜は一步も動けず

にいた。

その光景を思い出しただけで、言いようのない寂しさが胸に込み上げてくる。
(ついさっきまで、不安だったはずなのに……。一体、どうしちゃったんだろう)

美桜が一人で悶々としている間に、障子で覆われた大きな窓には、いつしか煌びやかな夜景が広がっていた。色々あったせいとか、ルームサービスが届いてからも食べる気にならず、窓際のソファから景色をぼんやり眺めているうちに物思いに耽ふけっていたようだ。

不意に物音がしてゆっくり振り返ると、襖の傍で佇たずむ尊の姿があり、美桜の鼓動は大きく拍動するのだった。

しばし見つめ合った後、尊はおもむろに首だけで後ろに振り返った。

そうしてリビングのテーブルに並べられた手つかずの料理にチラッと目をやってから、口を開く。「何も食べてないようだが、体調でも悪いのか？」

感情の読み取れない端正な相貌と同じ、淡々とした抑揚のない、感情が一切こもらない低い声音。仕事に戻ると言っていたし、疲れているだけなのかもしれない。もしくは機嫌が悪いのか、どこか怒っているように聞こえる。

それなのに、耳にするだけでこんなにもホッとするのはなぜだろう。

尊に見惚れていたせいで、やや出遅れてしまったが、慌てて返事をする。

「……あっ、いえ。そういうわけじゃ……」

「ああ、なるほどな。極道者の施しは受けたくないってことか」

だが、すぐに返された思いもよらない尊の言葉に面食らうこととなる。

「……え？」

どういうわけか、尊は美桜が極道者である尊のことを快く思っていないと勘違いして機嫌を損ねているようだ。

どうしたものかと考えていると、いつの間にか美桜のすぐ傍まで来ていた尊が、重低音で語りかけてきた。

「隠さなくてもいい。俺についてきたことを後悔してるんだろう」

そこでようやく、尊が何に対して思い違いをしているかが判明する。

確かに尊が極道だと知って驚きはしたが、ついてきたことを後悔しているわけではない。

食欲がなかったのは、広い部屋に一人取り残されて心細かったのと、尊に飽きられたその後、どうなってしまうかが不安だったからだ。

(——どうしよう。私のせいで怒らせてしまったんだ。早く、誤解を解かないと)

美桜は慌てて立ち上がり、尊に飛びかからんばかりの勢いで必死に言い募る。

「あのっ、違うんです、誤解です！ 私、後悔なんかしてませんっ！」

だが再び、尊から意外すぎる言葉が返されて、美桜が抱いていた不安は全て杞憂だったことを知る。

「無理するな。怖がるのは当然だと思うが、礼なんて返してもらおうつもりはない。おまえには指一本触れるつもりもない」

それだけでも驚きだというのに、続けて美桜の心の内を見透かしたかのような言葉を放った。「もちろん、売り飛ばしたりするつもりもない。様子を見にただだから安心しろ。じゃあな」相変わらず素っ気ない声でそう言い置くと、踵かかとを返して美桜の元から立ち去ろうとする。意味がわからず、美桜は困惑するばかり。

その間にも、尊は歩みを進めていて、美桜からどんどん離れて行ってしまう。それがどうしようもなく、寂しく思えてならない。自分でも自分の気持ちがよくわからない。

ただはつきりしているのは、尊と離れてしまうのがどうしても嫌だということ。

そして、その衝動を自分ではコントロールできないということ——
今まさに部屋から立ち去ろうとする尊の腰元に抱きついて引き留めてしまった美桜は、そのことを身をもって実感することとなった。

「私、本当に後悔なんかしてません！ どういうわけか尊さんと離れたくないって思っちゃうんです。何でもしますから、飽きるまで傍に置いてください！ お願ひ、一人にしないでっ！」

そう美桜が言い切った刹那、尊は酷く驚いているのか、全ての動きをピタリと停止させた。

当の美桜はいえ、慌てて捲まく立てたせいか、全力疾走したときのように呼吸は乱れ、鼓動も加速し、胸まで苦しくなってくる。

けれどここで引き下がったら、尊は今度こそ部屋から出て行ってしまう。また一人にされてしまう。

（——そんなの絶対嫌だ。ずっと傍にいてほしい）

そんな思いに突き動かされて、美桜はなおも尊の腰にぎゅうぎゅうとしがみつくのだった。そこに尊から意外にも狼狽ぼうたいえたような声音が届く。

「……お、おまえ、どういうことか、わかって言ってるのか？」

「——へ!？」

尊からの問い掛けに、美桜は虚を突かれたように頓狂な声を発していた。

美桜は必死だったがために、思ったままを口にしたに過ぎない。

他意などまったくなかった。

「だから、わかって言ってるのかと聞いている」

まさか念押しされるとは思わず面食らう。

「……は、はい。思ったことを口にしただけなので」

美桜はキョトンとしたままそう答えるしかなかった。

それに対し尊は僅かに瞠目まごもくしてから、今度は違った質問を投げかけてくる。

「だったら、おまえは俺に惚れてるってことなのか？」

しかし、これまで男性と付き合った経験のない美桜にそんな自覚などあるはずもなく、自信満々に言い切ってしまう。

「まさか、初対面でそんな、ドラマや小説じゃありませんし」

それが意外だったのか、しばし尊は目を点にしていたが、すぐに途轍もなく低い声を響かせた。

「……俺のことを揶揄うとはいい度胸だな」

「——へっ!?」

言葉の真意がまつたく掴めず、美桜は見開いた目をパチパチと瞬かせることしかできないでいる。(ど、どういうこと?)

美桜を一瞥した尊は、口元に怪しい笑みを僅かに浮かべ、何かを呟くように独り言ちた。

「いや、自覚がないだけか」

尊の声を拾うことができなかつたので、相も変わらず美桜はキョトンとしたままだ。

しばらくして、不意に尊が動く気配がしたかと思えば、美桜の身体がグラリと傾いていく。

(——な、何? もしかして地震?)

そんなことを考えていると、尊の肩に担がれてしまう。

そうしてスタスタと歩き始めた尊に寢室の大きなベッドの上へと下ろされ、あつという間に組み敷かれてしまった。

突然の出来事に、美桜は目を丸くすることしかできずにいる。

「俺を煽つたのはおまえだ。男を煽つたらどうなるか、今からたっぷりと身体に教え込んでやる。

覚悟はできてるんだろ?」

妖艶な色香を纏い、不遜な微笑を湛えた尊の言葉と尊のただならぬ色香にあてられた美桜は、夢現でコクンと顎を引いていたのだった。

美桜が呆然としていると、ふつと軽く笑つた尊から笑い混じりの低い声音が降ってきた。

「呆けてる場合じゃないだろ。俺を愉しませてくれるんじゃないやなかつたのか」
ハツとした美桜は、ようやく正気を取り戻す。

「——あつ、は、はいっ!」

脳裏に、昼間に尊から言い渡された言葉が蘇ってくる。

「何でもすると言つたのはおまえだ。だつたら、脱いで俺のことを愉しませてみる」

瞬く間に美桜は羞恥に見舞われる。だが、何でもすると言つたのは自分だ。飽きるまで傍に置いてもらうには、精一杯励むしかない。覚悟はとつくにできている。

ゴクリと喉を鳴らした美桜は、おずおずと振袖の襟元へと手を添えた。そうしてゆっくりとくつろげていく。

その様を無表情を決め込んだ尊に、射貫くように見据えられている。

どうにも恥ずかしくて仕方ない。顔どころか、身体中が熱くてどうしようもない。火でも噴いてしまいそうだ。

手まで震えてしまうが、それでも何とかゆっくり引き下げかけた刹那。尊から声を掛けられた。

「俺が怖いならやめてもいいんだぞ」

どういうわけか、そう告げた尊の声が悲しげに聞こえ、たちまち美桜の胸がキューツと締めつけられる。

美桜は羞恥も忘れ、感情の赴くままに心の内を吐露してしまう。

「さっきも言いましたけど、尊さんとは離れたくないって思うくらいです。怖くなんてありません。

ただ恥ずかしいだけです」

尊は、にわかに信じられないというような顔をしたが、すぐにその表情を消した。そうして妖艶な微笑を微かに湛たえた口元をゆっくり引き上げる。

その表情はどこか怪しく危うげで、途轍もなく艶めいている。男性なのに色っぽいなど思ってしまう。

それに香水でもつけているのか、ふんわりと甘い香りが微かに漂ってくる。全てにあてられた美桜は、くらくらとして今にも酔ってしまいそう。

「そうか。なら、俺の好きなようにさせてもらう。今からおまえは、俺だけのものだ。いいな？」そのせいか、尊からかけられた言葉は、とても傲慢なものなのにどこか優しい響きを孕んでいるように聞こえて。

（——尊さんだけのものにしてくれるんだ）

そう思うと、嬉しくてどうしようもない。

胸がいつぱいで、泣いてしまいそうだ。

助けてもらったからだろうか。

それとも、どこか懐かしさを感じてしまったからだろうか。

（どれも違う気がする。もしかして、これって……）

美桜が結論に辿り着こうとしていたそのとき、尊から焦れたような声音が届いた。

「おい、聞こえなかったのか？」

慌てて頭を振った美桜は、今度こそ尊にしっかりと応えてみせる。

「早く尊さんだけのものにしてください」

これは、尊に言われて仕方なく言ったのではない。紛れもない自分の意思だ。すると、うっとりするほど妖艶な微笑を湛たえた尊が、満足そうに美桜を見遣みやった。

「いい返事だ。褒美にたっぷり可愛がつてやる」

そう言って美桜の頭をそうと優しく撫で、そのまま組み敷いた美桜の唇に自身の唇をそうと重ね合わせた。

尊と交わした初めてのキスは、甘く、蕩けてしまいそうなほど極上だった。

柔らかい唇の感触を確かめるように、尊の唇が上下交互に啄つばむ。

食はむように挟はんでチユツと艶なめかしい音色を奏で、薄い表皮を吸引する。その動作を幾度となく

繰り返されるうち、あまりの心地良さに、美桜はうっとりとして夢見心地になった。

極上のキスで翻弄ひんろうされながら尊の端正な顔をぼんやりと眺めてみると、唇が不意に解放された。

「どうした？ 何か気になることでもあるのか？ それとも、何をされるか不安なのか？」

尊の怪訝けげんそうな低い声が響き、美桜は目をぼちくりさせた。

ぼんやりしていて反応が遅れたが、すっかり聞こえていたので、躊躇ちゅうちゆいつつも数秒遅れで口を開いた。

「……え、いや……あの、こういう……ことが……は、初めてで。だから……その」

だが、面と向かって伝えるのはどうにも恥ずかしい。訥々とつとつと紡ぎ出した言葉は、尻すぼみになっ

ていく。

「ああ、なるほどな。どうすればいいかわからなかったってわけか」

尊はすぐに察してくれたようだが、安堵できるような心境ではない。尊にハッキリ言われてしまうと、どうにもいたたまれなくなってくる。

見るからに経験豊富な尊からすれば、二十四歳にもなってキスの経験さえない自分よりも大人の女性のほうが好みに違いない。

それなのに、飽きるまで傍に置いてほしいなどと、よくも言えたものだ。

途端に尊に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになってくる。

「……はい。すみません」

だから謝ったというのに……

「謝る必要なんてない。むしろ楽しみだ」

尊から返ってきた言葉に、美桜は首を傾げるしかなかった。

「楽しみ？」

「ああ、仕込みがいがある」

「仕込み……がい？」

オウム返しする美桜に、どことなく嬉しそうな尊が言葉をかける。しかし、その言葉の意味が美桜にはまったく理解できなかった。

すると、ふっと笑みを零した尊は、困惑して眉根を寄せる美桜の頭を優しく撫でながら、今まで

で一番優しい声で囁きかけた。

「変なことを強要したりしないから安心しろ。ただ、おまえに女である悦びよろこびをじっくりと味わわせてやるだけだ。まずは、こうやって——」

その声音に美桜が聞き入っているうち、いつしか尊の手は美桜の着物の襟元へと辿り着いていた。そして気づくと、強引にはだけさせられた合わせ目から、さらに包まれた胸があらわになっていた。

「邪魔だな」

美桜が驚く間もなく、そう煩わしそうに呟いた尊に、またも強引にさらしをずり落とされ、素肌の胸がぶるんと零れ出る。

「——キャッ!？」

羞恥から思わず短い悲鳴を上げた美桜が腕で胸を隠そうとするが、やんわりと手で制されてしまった。

ただでさえ恥ずかしいというのに、尊にまじまじと見下ろされてしまっている。

童顔の美桜には不釣り合いな豊満な双丘を前に、尊は至極感心したように口を開く。

「初心なお嬢様は、随分と女らしい身体をしてるんだな」

その言葉を聞いて、美桜はこれ以上にないくらい全身を赤く染めあげ、身悶えるしかなかった。そんな中、美桜の耳に理解できない言葉が飛び込んできた。

「真っ赤になって恥じらう、愛らしいおまえ同様、美味そうだな」

恋愛経験はないが、こういうときに男性が女性を褒めるものだということは知っている。

「——でも、「美味そう」って、どういう意味だろう」

考え込んでいる美桜の視線の先で、尊が僅かに顔を綻ばせた。

うつとりするほど艶かしい、ただならぬ色香を纏った尊のニヤリとした不敵な微笑。

目にした瞬間、美桜の身体がゾクゾクッと粟立つような感覚に陥った。

その感覚が何からくるかもわからないまま、妖艶さを増した尊によって胸元へと顔を埋められてしまう。

ただ埋められたのではない。

粟立つ美桜同様の、ふるふると微かに悩ましく揺らめく胸の先端に、もう我慢ならないとばかりに、むしゃぶりつかれたのである。

「——ひゃんっ!？」

たちまち美桜の身体はビクンと大きく跳ね上がった。

のたうつように跳ね上がる美桜の華奢な身体をシャツに押さえつけるような体勢で、尊が覆い被さっている。

その様は、あたかも飢えた獣が捕らえた獲物の急所に狙いを定め、とどめを刺しているかのよう。尊は愛撫を施しつつ、身につけていたスーツのジャケットを手早く脱ぎ去り、ベッドの外へと放り投げた。

同じく煩わしそうにネクタイを緩め、シュルツと襟元から抜き去り投げ捨てる。

そうして流れるような所作で、熟れた果実のような膨らみを淫らな形へ変えながら、やわやわと揉みしだく。

口の中には硬くなった乳首を含み、熱くねっとりとした舌と唇で、愛撫するように舐めたり、優しく転がしたり、甘く吸い上げたりを繰り返す。時折、尖った犬歯を穿ち、翳るように弄ぶ。

「やあ、ああっ……んう」

尊が初めて与える甘美な快樂に、美桜は我を忘れ、乱れた姿でただ喘ぐことしかできなかった。

美桜が持つ乏しい知識の中にも、セックスがどういうものであるかは、当然含まれている。

けれども、実際に自分がそういう状況に置かれると、はまったく違っていたことを思い知らされる。

胸を攻め立てられているだけだというのに、こんなふうになるなんて、思いもしなかった。

この世のものとは思えぬほど甘やかな快感に身悶え続けて、息も絶え絶えだ。

そんな美桜の眺めには、悲しくもないのに透明な雫が滲みはじめていた。

快樂に溺れ、今にも泣き出しそうな美桜の切ない顔を一目見て、愛撫を中断した尊が感心したように声を漏らした。

「まだ胸しか触れていないのに、そんな乱れて。えらく敏感なんだな」

とんでもなく淫らではないと言いつつ渡された気がして、たちまち身体が滾るように熱くなる。それなのに、美桜に追い打ちでもかけるように、尊が意地の悪い声を浴びせた。

「この様子だと、もう濡れてるんじゃないのか」

しかし、男性経験のない美桜はその言葉の意味がわからず、不敵な笑みを浮かべて見下ろす尊の端正な顔をキョトンと見つめ返した。すると、乳房を掴んでいた尊の手の動きがピタリと止まり、離れていく。

絶え間なく続いた快楽から解放されると、美桜が安堵する間もなく、信じられないことに、尊が着物の裾の合わせ目から手を忍ばせてきた。

声を発するよりも先に、シヨーツのクロッチ越しに何かを探るようにして、いやらしい手つきで秘裂をなぞりあげられてしまう。

「……っ!？」

明らかに湿り気を帯びた下着の冷たい感触に驚愕した美桜は、声にならない声を発して身悶える。尊に胸を愛撫されている際、身体の芯が火照り、下腹部が疼くような妙な感覚を自覚してはいたが、まさか下着まで濡らしていたとは思ってもしなかったのだ。

美桜が驚いていると、相変わらず感心したような表情の尊から、意地悪な言葉が向けられた。

「すごいな。下着までぐっしより濡れてるぞ。俺に胸をしゃぶられるのが、そんなに気持ちよかったか？」

「……ち、ちがっ」

とんでもない羞恥に、美桜は叫ぶように反論した。しかし、尊はすかさずこう言い放った。

「そうか。なら、今度は、物欲しそうに涎を垂らしてる、こつちを可愛がってやらないとな」

口元に不敵な笑みを浮かべた尊は、卑猥で意地の悪い、何とも意味深な言葉を美桜に浴びせた。

その意味を理解したときには、下着はずらされ、蜜でぬかるむ蜜口へと、尊の長く節くれた指がズブズブと沈められていた。

「あっ、やあ……んんっ」

尊の指を胎内に受け入れた異物感に美桜が慄いているうちに、いつしか身体はくの字に折り曲げられてしまっている。

ほんの一瞬の出来事に、まったく思考が追いつかない。

状況を確かめようと美桜が目をつむった先には、まさに今、大胆に開かれた自身の股間に顔を埋めようとしている尊の端正な顔があった。美桜はとてつもなく恥ずかしい状況に追い込まれてしまったのだ。

まだ入浴前で不浄なはずの場所に、尊は一切躊躇することなく、舌なめずりをして口づけようとしている。

「——えっ!？ 嘘。そんなところに……!」

驚愕した美桜は、思わず臉をギュッと閉ざしてしまう。

内股にチュッとというリップ音を響かせ、尊が口づけを落とす感触が伝わってくる。

次の瞬間、肌の表面をきつく吸い上げられ、美桜はチクリとした微かな痛みを覚える。

その感触に目を見開くと、上目遣いに美桜を射貫くような強い眼差しで見据える尊の姿があった。あたかも、仕留めた獲物を前に歓喜する百獣の王のような、危うさと獐猛さを孕んでいる。その様を捉えた刹那、ゾクゾクッと身体に戦慄が駆け巡った。

同時に、尊の長い指を受け入れたままの蜜洞がキュンと疼く。まるで自身の体内に指を取り込むかのようにきつく締めつける。

（——尊さんの指でぐちゃぐちゃにしてほしい）

そう心が身体に訴えかけてくるかのよう。そして、その先の期待感に身体が反応して打ち震える。とんでもなくはしたくないことを望んでいる自分が、酷くいやらしく淫奔な気がして、どうしようもなく恥ずかしい。

それらを尊は、まるでお見通しだとも言うように、意地の悪い言葉で攻め立ててくる。

「そんなに強く啜え込んで、もう指だけじゃ物足りないのか？」

「ち、違いますっ！」

凶星を突かれた美桜は、ポツと音がしそうなほど全身を紅潮させて抗議するのがやつとだ。

美桜のあからさまな態度に、尊はふっと不敵な笑みを零し、顔を綻ばせた。

恐ろしく整った顔立ちに妖艶な色香を漂わせ、ニヤリと口元を吊り上げて笑うその様は、この世のものとは思えないほど美しい。

尊の姿に魅入られた美桜は、呆然としたまま身動きさえもできずにいる。

鼓動はさつきよりも速い速度でドクドクと高鳴りはじめる。

そんな美桜の内股を味見でもするかのように、赤く熱い舌でペロリと舐めあげる。

その直後、尊からゾクゾクするような艶を帯びた重低音が放たれた。

「初心なお嬢様は、素直な身体とは違って意外と反抗的なんだな。泣かせるつもりはなかった

が……精も根も尽きるまで散々抱いて、どうなるか見てみたくなるな」

それがとても意味深なものだったせいか、美桜の背中をゾクゾクとした感覚が這い上がっていく。恐怖心からではない。期待感に満ちた身体が武者震いを起こしたのだ。

尊に興味を持ってもらえたことが嬉しいという気持ちだっただけだ。

尊の肩書に不安がないと言えば嘘になる。

だけど、どうしてだろう。

初対面であるはずの尊に懐かしさを覚えてしまったときと同じように、尊にならどうされてもいとさえ思ってしまったている。

尊の言葉通りに抱かれたら、尊に少しでも近づくことができるかもしれない。

もっともっと、尊のことを知りたい——

そんな想いがどんどん膨らんでいく。

（——これってやつぱり、尊さんのことを……）

そこまで思い至り、美桜はそっと心に蓋をする。

この人は、「飽きるまで傍に置いてください」「お願い、一人にしないで」そう言って縋りついた美桜にただ応えてくれているにすぎない。

それなのに、こんな感情を抱いてしまったら、自分が辛くなるだけだ。

きつと、尊にも煩わしい思いをさせることになる。

そうなれば、傍に置いてなどくれないだろう。

そう思った途端、胸が切ないほどに締めつけられる。気づけば、頬には生ぬるい雫が流れ落ちる感触がした。それが涙だと認識した刹那、美桜の頬に尊の手が差し伸べられていた。

そうつと涙の跡をなぞるようにして、優しく拭う尊の指の感触が途轍もなく心地良い。

美桜は為す術なく、ぼんやりと尊のことは見つめることしかできずにいた。

そこに、無表情を決め込んだ尊が淡々と問い掛けてくる。

「俺の言葉が怖かったからか？」

「違います。尊さんに抱いてもらえないらだって思ったら、勝手に出ちゃ——んんっ!?」

美桜が最後まで答えきらないうちに、その声は途絶えてしまう。

なぜなら、いきなり覆い被さってきた尊により、美桜の唇は声音もろとも強引に奪い去られたから。

先程までの優しいキスとはまるで違う、深くて激しい大人のキス。

我が物顔で強引に振じ込んできた舌で、驚きを隠せずにいる美桜の舌を搦め捕る。

尊の熱くねっとりとした舌で舌の表面を幾度も擦られ、強く吸引されるうち、美桜の身体から力が抜けていく。

完全に力が抜けた頃、ようやくキスから解放された。

同時に尊が身体から離れていくと、言いようのない寂しさを覚えてしまう。

美桜はそれを胸の奥に抑え込み、涙で歪んだ視界に映り込む尊の姿をぼんやりと見遣っていた。

何度か瞬きしているうち少しずつクリアになっていく視界。

そこにたつた今、黒いワイシャツを脱ぎ捨てた尊の細身ながらに鍛え上げられた半裸が姿を現した瞬間、瞠目した美桜は思わず息を呑んでしまった。

なぜなら、尊の身体には、極道者の証である刺青が描かれていたから。

——綺麗

禍々しいはずの刺青を見てそんなふうを感じる日が来るなんて、思いもしなかった。

極道に対して、美桜の持つイメージがごとごとく打ち砕かれた瞬間でもあった。

尊が極道者だと聞かされてはいたものの、どこか現実味がなかった。

気品を感じさせる立ち居振る舞いや、恐ろしく整った容貌のせいだ。

それがどうだろう。

端正な相貌の尊に見合う均整の取れた精悍な体躯に、鮮やかな色彩で緻密に描かれた和彫りの龍は、とても神秘的で神々しいほどに輝いて見える。

正面からは右肩のあたりにある龍の顔しか見えず、全貌を伺い知ることにはできない。だが、美しい龍が天に向かって力強く駆け昇っていく姿は、さぞかし圧巻だろう。

何よりも、美しくも雄々しい顔つきの龍の周りを薄紅色の桜の花びらがひらひらと舞う様子が、実に見事だった。

幼い頃、薫に叱られると、泣きながら庭のソメイヨシノをぼんやりと眺めていたが、そのときの光景が蘇ってくる。